

世の中にはびこる馬鹿

私は今びくびくものでベンをとつてゐる。原因が複雑な上に、広大無辺な影響力をもつて全世界を支配しているものを、これから明らかにしようといふのだから。人間という、これからとりあげる面白い現象の主人公が、世の中にはびこっている限りは、このものは恐らくその支配力を失うことはあるまい。このものとは馬鹿のことである。

人間の知的な蓄えは貧弱さの点でも、動物よりもずっと幅が広い。つまり野生動物では自然淘汰の、家畜では人為淘汰の結果として、馬や高等動物での馬鹿の頻度は、人間の場合よりもずっと少なくなつてゐるはずである。ところが人間では知的な蓄えの貧しいものが無制限に繁殖する。

このように広く人類全体に行き渡つた馬鹿という性質は生命に危険を与えない、したがつて主病とはならない。それでなければ馬鹿がこんなに広くひろがろうはずがない。今日の文明化した、いわゆる高度の教養ある民族においても、個人の生存にはある程度の馬鹿さがかえつて必要なのである。事実たくさんえらい神父、哲学者、思想家たちは、普通の人間は知能が乏しいために生活上あまり難儀しないで、少なくとも長生きできるのだ、と言つてゐる。

人類の大多数が知的に貧弱だということはご承知の通りで、これは過去何世紀にもわたつて繰り返し主張されてきたのであるが、誰も大して驚かなかつたとは不思議なことである。医学は人間の身体の健康ばかりを問題にして、その精神的な、知的な性質を気にとめなかつた。古くはすでにローマの風刺詩人が、世には健康な肉体は数多いが、健康な精神は少ないと嘆いてゐる。いつも体操の先生方はこのことわざをまちがつて引用し、「健全な身体には健全な精神が宿る」というが、ユベナルはこんな理屈に合わないことはいわず、「健全な身体に健全な精神が宿ればよいのだが」といつてゐる。これがこの有名な格言の正しい解釈であつて、これを見ても、すでに古代ローマにはすばらしいスポーツマンが大勢いたけれども、このからだにふさわしい有能な精神は今と同じくまれであつたことがわかるであろう。スポーツと体育の礼賛者にとつて昔からの悩みの種は、最も賢い人びとが貧弱な体格の持ち主だつたこと、イマニュエル・カントやフリードリッヒ・シラーが体力の点ではあまり感服できなかつたことである。(九五〇字、引用にあたつて一部表現と表記を改めた)

ホルスト・ガイヤー『馬鹿について』(創元社、一九五七)より